

並木道

岡 並木

Namiki OKA

1691年に来日したオランダ船の船医ケンペルが、『江戸参府旅行日記』（東洋文庫）の中で、東海道についてこう書いている。

「この国の街道には、毎日信じられないほどの人間がいる。これらの街道は幅広くゆったりとしているので、二つの旅行隊は触れ合うこともなくすれ違ふことができる。町や村を除いて、木陰をつくって旅行者を楽しませるように、松の木が街道の両側に狭い間隔でまっすぐに並んで植えてある」。

同じようなことを、130年後に来たオランダ商館のフィッセルも『日本風俗備考』に書いている。「険しい山地の場合は別として、一般に道路は非常に注意深く手入れが行き届いており、大抵の場合、驚くほどに広いので、諸侯および家臣たちの大行列が、お互いに何の支障もなく行き交うことが出来るくらいである。道路にはしばしば松、杉、栗、または桜の木々の美しい並木道が出来ている」。

ふたりとも、日本の街道の見事さにカルチャーショックを受けたのであろう。

江戸幕府が五街道の整備にかかったのは、幕府が江戸に生まれた翌年の1604年だった。やがて並木や一里塚も整備されていく。

ところでヨーロッパで首都を中心に街道の整備に着手したのは、フランスのルイ14世で、1669年だったが、五街道とは違い、整備するはじから壊れていた。イギリスの本格的な街道整備はさらに遅れて、18世紀の半ば過ぎからである。そのうえ1770年になっても都市間道路でさえ「ぬかるみは、実測してみると120センチの深さがあった」という記録が残っている。

並木道の歴史も、日本はヨーロッパよりはるかに古い。奈良に都があった759年、東大寺の僧、普照の奏上で、畿内七道に果樹の並木が植えられたという。これは平安末期に編纂された法令集『類聚三代格るいじゆうさんだいぎやく』巻七に「畿内七道諸国駅路兩邊遍種菓樹叟」として次のように記録されている。

「畿内、七つの街道には人々の往来が絶えません。木があれば疲れたときに休めるし、夏は木陰で暑さを凌げます。また空腹ならば実を食べることも出来ます。どうか街道の両側に果樹を植えて下さい」。

しかも並木道を育てる考え方は、都が京都に移っても引き継がれたようだ。同書の巻十九によると、821年には「道沿いに植えた樹木は道行くみんなのものであり、これを傷つけたり伐採してはならない」という命令が出ている。

ヨーロッパの並木道は16世紀にフランスで生まれたという。しかしそれは日本と違って旅人のためではなく、軍隊の武器や物資を運ぶ木造のワゴンや舟が壊れたときに、応急の木材を調達出来るように、道や川に沿って木を植えたというのだ。しかしやがてこの並木道の作る木陰が、旅人にオアシスにもなることが分かって、並木道が普及することになったといわれている。シンガポールが1970年代半ばから並木道の整備を積極的に始めたのは、炎天下の街での抵抗なく歩ける距離を400mまで延ばそうという意図があったからという。

普照の並木道の発想は、人間の暮らしに大事な意味を持っているのに、日本ではそれがこの約百年、急激な技術開化のあおりで忘れられがちだった。最近、並木道を見直す動きが各地で起こってきたが、一方では落ち葉が邪魔だから切り倒せ、という声も出ている。落ち葉ぐらい自分たちのまちで始末が出来ないのかと思う。いっそ落ち葉のない砂漠か北極へ移住したらどうですか、と尋ねてみたい。

原稿受理 1996年3月18日